

## 諫早平坦地におけるシロガネコムギの栽培法

西村勝久・泉 省吾・船場 貢(長崎県総合農林試験場)

Katsuhisa NISHIMURA, Syogo IZUMI and Mitsugu FUNABA : Cultivation Method of Wheat Cultivar "SHIROGANekomugi" in Flat Area of ISAHAYA

長崎県下の主要な小麦作地帯である有明海諫早湾沿岸の重粘土壌の平坦地において、高品質で安定的に多収を得ることを目的とし、播種様式、播種量、施肥法について検討した。

### 1. 材料及び方法

試験年度は、1991～1993年秋播の3か年で、供試品種はシロガネコムギを用いた。土壌は細粒グライ土で、播種量は5・7・10・13・15kg/10aとした。播種様式は、現地慣行栽培の4条播を標準として、これを改良した広幅2条播、密条8条播の3播種法について検討した。施肥量は、基肥5.6kg、分けつ肥4.2kg、穂肥3.6kg、計13.4kg(窒素成分10/a)を標肥として、分けつ肥を2kg増肥した区を設けた。

### 2. 結果及び考察

1) 播種量7kg/10a、標肥栽培において、苗立数は播種条件が良好であった'91年播では4条≒8条播>広幅播の順であった。'92及び'93年播は、播種時期に降雨が多く、特に'93年播は、長雨で播種時期が慣行の11月中下旬より著しく遅れ12月中旬播となったが、このような状態では8条播で苗立数が多く確保でき、苗立率は他の播種法より1割高かった。3か年平均でみると、稈長は3播種法とも同程度だったが、穂数は8条播が多く、

次いで4条播、広幅播であった。わら重には3播種法間に差はなく、精麦重は年次によって傾向が異なり、3か年平均では播種法間に差はみられなかった。検査等級にも、年次の差はあるが播種法間に差はみられなかった(第1表)。

2) 苗立数と収量の関係では、年次により傾向が異なるが、3か年を通算するとm<sup>2</sup>当たりの苗立数は160～180本程度が適当と思われた(第1図)。この苗立を確保するための播種量は、種子の千粒重35g程度で、播種条件がよいとき(苗立率90～80%)で6～8kg程度、播種条件が悪いとき(苗立率80～70%)で7～9kgである。

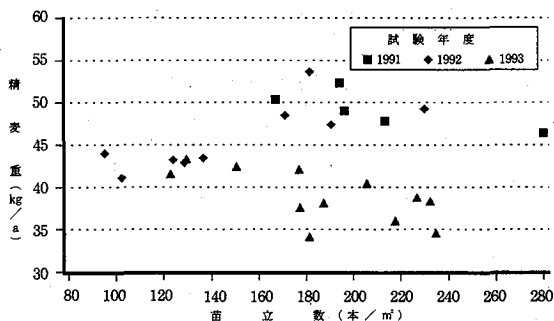
3) 各年の各播種法、各播種量の標肥区収量に対する各増肥区の収量は、全ての区において1割程度増収した(第2図)。さらに、概して播種量が多い場合に増収の傾向が大きかった。また、'93年秋播のような播種時期が遅れ苗立が低かった年においても増肥した方が収量を高めることができた。

以上のことから、この地域では、4条播、広幅2条播、密条8条播の3播種法では収量及び検査等級には播種法間の差はなく、また、最適播種量は7～8kg/10a、施肥量は分けつ肥を2kg/10a(窒素成分量)増肥した方が良い結果を得た。

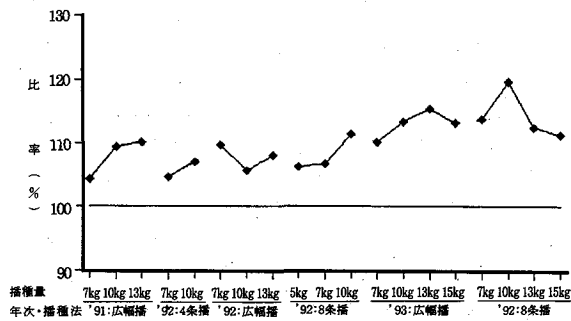
第1表 播種法の違いと生育・収量

試験区	苗立数 (本/m <sup>2</sup> )			出芽率 (%)			稈数 (本/m <sup>2</sup> )			わら重 (kg/10a)			精麦重 (kg/10a)			検査等級 (1～6)					
	'91	'92	'93	'91	'92	'93	'91	'92	'93	'91	'92	'93	'91	'92	'93	'91	'92	'93			
4条播	194	129	123	89	66	62	83	83	68	674	519	582	64	53	31	52.4	42.9	41.5	4.5	2.0	1.0
広幅播	167	124	129	76	63	66	82	85	65	614	535	585	62	52	32	50.3	43.2	43.3	5.5	1.5	1.0
8条播	196	136	151	89	70	76	82	84	67	684	574	607	61	54	32	49.1	43.4	42.4	5.5	2.0	1.0
4条播 平	149			72			78			592			50			46.6			2.5		
広幅播 均	140			68			77			578			49			46.6			2.7		
8条播	161			78			78			622			49			46.1			3.0		

注) 播種量: 7kg/10a, 施肥量: 標肥。検査等級は1:1等上, 2:1等中, 3:1等下, 4:2等上, 5:2等中, 6:2等下



第1図 苗立数と収量(標肥区)



第2図 標肥区に対する分けつ肥増肥区の収量比